



夢の本棚

発行所：松居直コレクション
プロジェクト
代 表：金戸 美紀予
事務局：石川県小松市
小馬出町10-3
空とこども絵本館
☎ 0761-23-0033
bookrin@city.komatsu.lg.jp



【活動方針】①絵本の楽しさを伝える <親子読書の奨励> ②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える <絵本文化の研究>
③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える <絵本文化の継承>

から、どうしても、遠くの子どもたちが見られるように大型絵本の需要があったんですけど、実は私が社長をやっている頃は出ていないんです。その後で、ポランティアの活動が盛んになってきたんです◆「読み聞かせ」ということが一つのジャンルになりましたから、紙芝居とかと同じように「大きな絵本を作ってもらえれば子どもたちがよく分かる」ってことで出すようになった

読み聞かせをする上で大型絵本と小さいままの絵本は、どんな点に違いがあるのでしょうか？

◆ポランティアで子どもたちに本を読んでもやるといことが盛んになりました



絵本講座「空とこども絵本館」の講演会終了後のQ&Aより



私の学校では、生まれつき目の見えない、また耳の聞こえないお子さんがいます。絵本を読み語っていく上で心がけたらよいことは何でしょう？



わけです◆けれども、できましたら私は、本の形、小さな本の形のままで読んでやった方がいいんじゃないかなあと思っています。本を手にするということが、見るだけじゃないんです。本を手にする感覚が子どもたちに定着したら、本を手にするのが生活習慣になる。読書もそうです。見るだけではだめなんです。「自分でページをめくって見る」ということ、それが本というものの本質なんです。

◆大阪に岩田さんという方がいらして、ご本人もご主人も見えないんです。お子さんは目がみえるんですけど、そのお子さんに自分で絵本を読んでやりたいということ、**「点字の絵本」**を何十年もやってらして、点字の絵本を作って全国に貸し出しをしてらっしゃるんです。自分の声で子どもに絵本を語りたいのと、もう一つは、目の不自由な子どもたちのために、点字の絵本にいろんな絵の工夫をしてらっしゃるんです◆たとえば、「**ちいさなてぶくろ**」っていう本の中で、小さな黒い手袋が出てくると、そこへ小さな黒い手袋を貼り付けるとかですね。お子さんが、お日様の光が非常に暖かいものだと知っていて、お日様の本を手で触れるようにフェルト

を貼って、太陽の形に触れるようにされたんですね。最初は一枚しかフェルトを貼られなかったんですけど、お子さんが「お日様はもっと暖かいもんだ」と言っていたんです。それで2枚に重ね、3枚にと重ねていったところ「あ、これならお日様の暖かさが分かる」って納得をされたんです◆そういういろいろな工夫をして、子どもと一緒に、子どもが「手で触れる絵本」を作って、全国に貸し出しをしてらっしゃる。その貸し出しの送料ってのは、国会決議で無料になってるんです。こういうほんとに身体の不自由な子どもたちのために、いろんな所でいろんな工夫がされてますから、そういう情報をもっともっと広げられるといいと思います。

施設では耳が遠い人が多くいます。どのように絵本を読んでもいいのでしょうか？

◆その人がどういう気持ちで語っているかってところが、顔の表情や声の調子で伝わってくるものがありませんから、全身で気持ちを込めて語ってくださるといいと思います。また、繰り返しやりますと、その人の読み方のくせや聞き方のくせが分かりますから、そういう人間関係が大切じゃないでしょうか。

大は何か？
話はどうか？
素話なことでしょ



◆いろいろな読み方や伝え方があっていいんじゃないかと思えます。ただ、自分の中に取っ込んで自分の言葉で語る。覚えて、記憶して語らんじゃなくて、自分が日常生活で使ってる言葉で語るような気持ちで、ぜひ語ってほしいと思います。

